

## 東京大学大学院経済学研究科の古貨幣・古札について

東京大学大学院経済学研究科助手

小島浩之

東京大学大学院経済学研究科では多数の貨幣と紙幣を所蔵しており、質的には日本銀行貨幣博物館に次ぐものとされながら、これまであまり知られていなかった。そこでこのコレクションを今後の歴史学研究に生かすべく、今年度、科学研究費補助金研究成果公開促進費を得て、データベース化の作業に着手している。本稿ではこのコレクションの概略や今回の作業において知り得た情報等を報告し、大方の批正を仰ぎたい。

### (1) 藤井コレクション

貨幣では藤井榮三郎(号:深藪庵)氏旧蔵古貨幣(約 12,000 点)が最大のコレクションである。藤井は化学工場経営の傍ら明治末年頃より古貨幣の蒐集を志し、大正 7 年には東洋貨幣協会専務理事、同 9 年には副会長となり、当時の貨幣蒐集家たちをリードする存在であった。しかし関東大震災で東京市本所(現墨田区)にあった工場は壊滅し家業を廃業。その後、還暦を期に財産を整理、物理化学など学術学会への寄付行為など篤志家として活動を続けたという。おそらく一連の寄付行為の一つとして貨幣の寄贈も行われたのであろう。本研究科の古貨幣も震災後の昭和 2 年に寄贈されている。

### (2) 安田コレクション

紙幣では二代目安田善次郎(号:松廼舎)氏旧蔵の古札(約 25,000 点)が大規模なコレクションである<sup>1</sup>。安田は安田財閥の創始者である初代安田善次郎の長男であり、古書蒐集家・古銭蒐集家としても知られている。このコレクションは大正 12 年に「経済学攻究資料」として寄贈され、昭和 4 年に東京大学に搬入された。そもそもこのコレクションは、藩札狂と呼ばれた前田惇氏の蒐集品の一部であった<sup>2</sup>。これを安田が入手した動機や経緯は詳らかではない。安田銀行の経営者という公の側面と、書誌学への興味という私の側面の両方から関心を持ったのではないかと推察される。

### (3) 藤井・安田コレクションに共通する特徴

藤井・安田の両コレクションは、旧蔵者も蒐集対象も異なっているが、高い学術的価値を有している点で共通している。学術的な観点から体系的に蒐集されたものである点が多いに評価されるべきだろう。

藤井は寄贈の際に編んだ原拓本本『寶貨録』の序に次のように記している。

つらつら惟うに明治の聖代以降、學術の事、悉く備りて泰西に譲らず、唯だ錢貨の學の未だ起らざる有るは、最も遺憾たり。不肖之を茲に志すこと二十有餘年なり。集むる所の同文國の錢貨殆んど備われり。則ち歴史を徵めて事蹟に鑑がみ、孜々として倦まず、

研鑽して一日を空費せず。然りと雖も頽齡して耳順を超え、中途の挫折を恐る。今聞くならく我が最高學府に錢幣の實物有らず、故に學者史上に記す所の錢幣、其の名を知りて其の物を識らず、常に隔靴搔痒の嘆有り、と。不肖之を聽き、大いに感ずる所有り。直ちに蒐集する所の錢幣を挙げ、東京帝國大學に寄贈し、以て學者の嘆を除き、學府の闕を補わんと欲す。<sup>3</sup>

ここからは學術研究の貴重な資料としてコレクションの保存と活用を念頭に置いた寄贈であることが読みとれる。寄贈に際して受入担当責任者であった山崎覺次郎教授(当時)も、前掲の序の一部を引用して「寄贈の趣旨に辜負しないやうに、十分コレクションを利用して研究に従事することが、我々の責務である。」<sup>4</sup>と述べ、藤井の意向を最大限尊重することを表明している。当時、貨幣そのものの分析に関わるのは研究者ではなく古錢蒐集家だとの認識が強かった。藤井はこの傾向を嫌い研究重視の姿勢を鮮明にしたため学究肌として知られていたという。前の序文はそんな藤井の一面を鮮明に描き出している。

また安田は書誌学に造詣が深く、善本、稀覯本を多く蒐集して松廼舎文庫(関東大震災で焼失)、安田文庫(戦災で焼失)の両文庫を開設したことでも知られる。研究者への學術支援も惜しまなかった。これらを勘案するに安田の「経済学攻究資料」という寄贈理由も決して名目だけではないだろう。

このように両コレクションは、旧蔵者の學術研究への深い理解の下、蒐集されたものであったのである。

#### (4) 公開までの長い道のり

本研究科では両コレクションの寄贈趣旨を生かすべく再三検討がなされてきた。特筆すべきは、昭和 30 年代に、田中啓文氏(藤井氏の友人で貨幣蒐集の大家。氏の所蔵品が現在の日本銀行貨幣博物館の基礎となっている)と日本銀行の郡司勇夫氏を招き座談会が開催されたことである<sup>5</sup>。この座談会の意義は、両コレクションの成立過程や寄贈経緯を記録に残したことにある。しかしその公開や活用といった点については明確な方向性を定めることはできなかった。その後、昭和 54 年から 57 年にかけて、学内経費や科学研究費によって再度の大整理がなされることになる。この時、やはり郡司氏に協力を依頼し貨幣全点と紙幣全種について、写真撮影の上、目録カードを作成した。さらに平成 8~10 年には図録および目録を作成し、古貨幣・古札収納設備の更新が行われた。しかし公開や活用についてはついに有効な手だてを打つことができなかった。

ところが近年のインターネット環境の充実は、かかる公開の問題を一気に解決してしまった。インターネットを通じた画像データベースの公開により、本研究科の所蔵資料を全世界に一瞬で発信できるようになったのである。今年度末までには、科学研究費補助金を利用して両コレクションのうち、かなりの部分について Web 公開する予定である。

#### (5) 収蔵品の特徴と問題点 先秦貨幣を中心として -

最後に収蔵品の特徴と問題点について先秦貨幣を中心に述べる。藤井コレクションのうち中国貨幣は約半数を占めている。このうち唐以前の貨幣について郡司氏は次のように最大の賛辞を述べている。

唐朝以前の古代貨が大量にあり、目を見はらされる。特に戦国時代の刀幣や布銭の各種の収蔵量は現在本邦に在って日本銀行収蔵に次ぐもので、断然他の収蔵品を凌駕している。<sup>6</sup>

次の表は田中啓文コレクション即ち日本銀行所蔵貨幣と本研究科の藤井コレクションのうち、先秦貨幣について数量を比較したものである。日本銀行貨幣博物館はその所蔵数について詳細を明らかにしていない。そこで郡司氏が報告している日本銀行寄贈以前の田中コレクションの状況<sup>7</sup>と、筆者が数え上げた東大所蔵の藤井コレクションの状況に基づき比較を試みる。ただし郡司論文では一部が概数でしか示されていない。そこでこれらについては表中で\*を付した。また藤井コレクションについても、田中コレクションの分類と対応が不明確で数量が確定できないものについて概数で示した(斜体字)。

田中コレクションと藤井コレクションにおける先秦貨幣所蔵数

|     | 分類名     | 田中コレクション | 藤井コレクション |
|-----|---------|----------|----------|
| 布 銭 | 空首布     | * 300    | 30       |
|     | 尖足布     | * 600    | 250      |
|     | 方足布     | * 1,000  | 185      |
|     | 有耳布     | * 30     | 9        |
|     | 円足布     | 100      | 12       |
|     | 三孔布     | 22       | 0        |
|     | 円肩・方肩布  | 100      | 27       |
|     | 長布・連布   | 10       | 4        |
| 刀 銭 | 尖首刀     | * 190    | 60       |
|     | 方首刀     | 300      | 325      |
|     | 直刀      | 38       | 17       |
|     | 反首刀     | 90       | 44       |
| 円形銭 | 古圓法(円孔) | * 50     | 1        |
|     | 古圓法(方孔) | 90       | 22       |
| その他 | 蟻鼻銭     | 60       | 10       |

田中コレクション全体の数量は10数万点と言われているので、藤井コレクション全体は田中コレクションの約十分の一に当たる。これを考慮すると藤井コレクションに占める先秦貨幣の割合は相対的に高いことが解るであろう。特に布銭では尖足布の、刀銭では明刀(方首刀)の数量の多さが目を引く。一般に尖足布と方足布を数量的に比較した場合、方足布の方が多量である場合が多い<sup>8</sup>。しかし藤井コレクションでは尖足布が方足布を上回っ

ている。また明刀（方首刀）の数量は田中コレクションを上回るほど多い。さらに布銭においては数量の割に重複は少なく、裏面の金文の相違にまで注意して蒐集されていることが特筆される。

ただし今回の調査で次のような問題点も浮かび上がった。

- ( 1 ) 整理が昭和 50 年代のため、中国におけるその後の研究成果が反映されていない
- ( 2 ) 分類についても現在の研究成果との間に断絶があり、名称が現在一般的なものと異なっている
- ( 3 ) 金文の誤読、誤釈がある
- ( 4 ) 刀銭において最大長を計測していない

これらの点については、日中の 1980 年代以降の貨幣研究の成果を取り入れつつ、今後修正する作業が必要であり、現在これらに取り組みつつある。

---

<sup>1</sup> このほか、安田家から東京大学に対する寄付では、初代安田善次郎による大講堂（安田講堂）が良く知られている。また近年、東京大学東洋文化研究所には正平本『論語』を含む貴重漢籍 11 種が安田家より寄贈された（詳細については橋本秀美「安田弘先生捐贈正平本『論語』等十一種」（『明日の東洋学』12, 2004.10）を参照のこと）。これらは旧安田文庫所蔵のものであり、東京大学と安田家の浅からぬ縁を感じさせる。なおこの点については、平勢隆郎教授よりご教示いただいた。

<sup>2</sup> 前田コレクションについては郡司勇夫「前田コレクション私見」（『月刊ボナンザ』8-9, 1972）同「古紙幣私考」（『月刊収集』10-4, 1985）を参照。

<sup>3</sup> 熟惟明治聖代以降、學術之事、悉備不讓于泰西、唯有錢貨學之未起、最為遺憾。不肖志之于茲二十有餘年矣。所集之同文國之錢貨殆備焉。則徵歷史鑑事蹟、孜孜不倦研鑽不空費一日。雖然頽齡超耳順、恐中途之挫折。今聞我最高學府不有錢幣之實物。故學者史上所記之錢幣、知其名不識其物。常有隔靴搔痒之嘆。不肖聽之、大有所感。直學所蒐集之錢幣、寄贈于東京帝國大學、以欲除學者之嘆、補學府之闕。

<sup>4</sup> 山崎覺次郎「藤井榮三郎氏の寄贈された東洋錢貨のコレクションに就いて」（『經友』10, 1928.1）

<sup>5</sup> 「經濟學部所蔵古貨幣コレクションに関する座談會記録」（『經濟学論集』23-2, 1955.2）

<sup>6</sup> 郡司勇夫「經濟学部所蔵古貨幣の内容について」（『昭和 57 年度化学研究費補助金一般研究(B)研究成果報告書』, 1982）

<sup>7</sup> 郡司勇夫「私の見た錢幣館主田中啓文先生 第 20 回」（『月刊ボナンザ』8-6, 1972）

<sup>8</sup> 江村治樹教授のご教示による